

【連載：一録音技術者の回顧録 ～アナログからデジタルへ～ 第8回】
デジタル録音が社会にインパクトを与えた事柄

日本オーディオ協会諮問委員 穴澤 健明

VIII-1. はじめに

前号では「ドイツ、オランダ、北欧のパイプオルガンに魅せられて」と題し、ヨーロッパでの歴史的オルガンの PCM／デジタル録音活動について記した。本号では、「デジタル録音が社会にインパクトを与えた事柄」と題し、まず世界最初の歌謡曲 PCM／デジタル録音での「美空ひばり」について記し、本稿の後半では消えてしまった国「東ドイツ」でのデジタル録音について記す。

VIII-2. 美空ひばりの世界最初の歌謡曲 PCM／デジタル録音

1970 年に PCM／デジタル録音装置の開発に着手した時点で、歌謡曲の PCM／デジタル録音は何が何でも美空ひばりで始めたいとの願望があり、録音装置が出来た暁には是非ということで当時美空ひばりの担当ディレクターで飲み友達でもあった故森啓氏に録音の手配を依頼していた。そして 1972 年 4 月に録音装置が完成しスメタナ弦楽四重奏団の録音が開始されるとその願望はより強くなった。この頃、暴力団追放運動が起き、弟の起こした不祥事をきっかけに、弟と共演の「美空ひばりショー」などへの公共施設の貸し出しを禁止する動きが始まり、家族との絆を尊ぶ美空ひばりも心を痛めていた。そしてとうとう 1973 年 1 月 17 日に鹿児島県の鹿屋市、川内市、名瀬市の 3 教育委員会が弟と共演の「美空ひばりショー」での公共施設の使用禁止を決定した。これを皮切りにこの動きが全国に拡大した。

この騒動の最中の 1973 年 1 月 19 日厚生年金会館で「美空ひばりストーリー・ワンマンショー」が開催されニッポン放送が放送した。この録音が世界最初の歌謡曲 PCM／デジタル録音であり、その録音は放送後 2 枚組のアナログレコード「美空ひばりオン・ステージ」が 1975 年 1 月 25 日に発売された。この放送やレコードに記録された「悲しい酒」（石本美由紀作詞／古賀政男作曲／佐々栄治編曲）は、1992 年 7 月に創立 40 周年を迎えた社団法人日本オーディオ協会設立記念 CD にも収められ、多くの方々に、この不世出の天才歌手の最盛期の美しい歌声とこの世のものとは思えない美空ひばりの悲しみの表現を感じ取っていただいた。この 1973 年の年末近くの 11 月 21 日には NHK が美空ひばりを第 24 回 NHK 紅白歌合戦に出演させないことを決定し、自身が出演を楽しみにしていた紅白出演の可能性もこの時点で閉ざされた。

この録音でのミキシングは、筆者の所属する録音部のエンジニアの大御所林正夫氏が担当し、緊張感に満ちた観客の熱気にあおられつつ滞りなく完了した。巻末の参考資料に記載した美空ひばり公式完全データブック永久保存版に、森ディレクターが美空ひばりの録音でのミキシングについて記している。ミキサーは熟練した 3 名の中から曲によってその中の 1 名を選び依頼したが、すべてに信頼関係が構築されていたため、この人選に美空ひばり親子が口を出すことは 1 回もなかったと言う。

当時のミキサーはプロであり、その作品の魅力を引き出すことのみを考えてジャンルによる好き嫌いとは無縁な世界でミキシングを行っていた。林正夫氏は、前年 4 月のスメタナ弦楽四重奏団による東京での世界最初の PCM／デジタル録音でもミキシングを担当した。

この美空ひばりの公演が終わり、重い録音機材を片付けていると、森ディレクターから楽屋に來いとの声がかかり、何とかひばりさんを励まさなければと思いつつ楽屋に行くと、森ディレクターからの技術背景についての説明があったようで、「今日は私のために新しい技術を使った録音を行ってくれたのですって、本当にありがとう。私も打ちのめされないで元気になって頑張るから、貴方がたも頑張って」と逆に美空ひばりさんにはっぱをかけられたことを覚えている。その後、ひばりさんは毅然として「弟をおろせというなら美空ひばりは死にます。おかゆをすすってでも親子一緒に生きてゆきます。」とマスコミの前で述べたという。この百年に一人の天才歌手と共に仕事できた喜びと互いに励ましあった経験は、その後の筆者の人生のなかでの最高の思い出であった。

もっともっと生きていて欲しかったひばりさんは、残念ながら本稿の後半で述べるベルリンの壁が崩れた 1989 年に死去された。享年 52 歳であった。

次は、同じ 1989 年にベルリンの壁が壊れるまでの東ドイツでの PCM/デジタル録音について記そう。

VIII-3. 東ドイツでのデジタル録音のはじまり

1975 年の初夏、チェコ北部、ポーランドと東ドイツの国境に近い寒村ルチャニー村の教会に重い機材を運び込み、東ヨーロッパ最初の PCM/デジタル録音をスメタナ弦楽四重奏団とスークトリオという最高の演奏者を得て開始すると、ある日二人の東ドイツからの来客を迎えた。東ドイツのレコード公社ドイッチェ・シャルブラッテンからの視察団であり、その中の一人は筆者が尊敬しその後親友となるクラウス・シュトルーベンであった。彼は EMI の制作販売したカラヤン指揮ワーグナー作曲の「ニュールンベルクのマイスタージンガー」ほか多くの名盤のドレスデンでの録音を担当したトーンマイスター（ミキサー）であった。

この日ルチャニー村の丘の上に立つ小さな教会で、チェコを代表するトーンマイスターのクールハン、デンマークを代表しフランス、イタリー、北欧で活躍するヴィルモース、そして東ドイツを代表するシュトルーベンと各国を代表するトーンマイスターが一堂に会したのである。一人一人個性豊かな人たちでお互いを尊重はするがお互いに意見が合うような集団ではなかった。若造であった筆者は其中で教を乞う立場に徹したためか、すべての人たちとの親友関係を構築することができ、良い作品良い演奏を最良の状態でデジタル録音するということに関してはすべてのメンバーの意見が一致していた。その後の 10 年間に行った各地でのデジタル録音



写真 1. 1975 年 1 月 25 日に発売された 2 枚組アナログ盤「美空ひばり オン・ステージ」のジャケット

プロジェクトでこの関係が生きた。

この前年 1974 年のパリとシュトゥットガルトでの西欧最初の PCM／デジタル録音には、フィリップスレコードとポリドール／グラモフォンレコードからの技術視察団が録音会場を訪れていた。また 1977 年のニューヨークでのジャズ録音の際には、当時の CBS レコードからデジタル録音の実験を行いたいのので機材を貸してほしいという申し出があり、録音機材を CBS レコードのスタジオに持ち込みテストを行って感謝されたこともある。一般にハード業界ではこのような場合秘密にし、見学を断るのが常であったが、我々の態度は異なっていた。デジタル録音はこれまで改善できなかった混変調歪を改善できるのであるから、アーティストに録音技術の重要さをまず理解をしていただいた上でアーティストの生きている間に最良の状態ですぐれた作品、すぐれた演奏を録音することこそが我々に責務と考えていたのである。言い換えれば原理は同じであるが、家庭用の民生用ハードの世界でデジタル録音媒体とその再生機が一般化し普及するのは、記録媒体の容量と通信の帯域と記録再生機の仕様が満足され、コストが大幅に低減される 10 年後、20 年後であろうと考えていたのである。そして 10 年後に CD が普及し始め、20 年後に配信が始まり、秘密の時代を経て、今では秘密にもならない世界にまで至っているのである。

この東ドイツからの視察団の目的は、外貨不足で困っている東ドイツ政府の意向を反映して、まずデジタル録音の状況を把握した上で、東ドイツに多数存在する優秀なオーケストラを貸し出し、併せて録音作業の請負も行って外貨を得ることにあった。そしてこのルチャニーでの録音が終わったところで我々は一度西側に戻り、改めて彼らの招きで東ベルリンとドレスデンを訪問した。その成果がその後の録音で生かされた。

まずベルリンについて触れておこう。ベルリンは 1945 年 5 月にソ連軍によって解放され、米軍がベルリンに入ったのはその 2 カ月後であった。ベルリンの解放の 2 週間後にはベルリンフィルの演奏会が開催され、その背後には後にほころびを見せるが音楽と演劇の守護神役を担ったソ連がいた。1955 年に東ベルリンのシンボルであったベルリン国立歌劇場が再建されたがすべてが波乱含みであった。劇場の帝国時代に設置された看板をどうするかでもめ、復興公演を担当するはずであったカルロス・クライバーの父親でナチスとの衝突の実績も持つ名指揮者エーリッヒ・クライバーが音楽監督を辞任し、コンピチュニーが代役を担った。

1961 年から西ベルリンとの経済格差等の山積する問題を一举に解決するために悪名高きベルリンの壁の構築が始まった。この壁が構築される前は、ベルリン国立歌劇場のメンバーの半数は西ベルリンに住み西のお札で給料が支払われていたが、壁の構築後西ベルリンに住むメンバーは働く場を失い。西ドイツに演奏の場を求めた。その代わりに東ドイツの優秀な地方オーケストラのメンバーがベルリン国立歌劇場管弦楽団に職を得た。

その後の紆余曲折を経て 1964 年からは、オーストリア出身の若き指揮者オトマール・スイートナーがこのベルリン国立歌劇場の音楽監督を 1990 年に引退するまで長期間務め、2010 年に 87 歳で逝去した。彼は教育者としても尊敬の念を持たれウィーンで多くの若手指揮者を育てた。1971 年に初来日し、日本でも多くの名演を披露し、1973 年には NHK 交響楽団の名誉指揮者にもなっていた。

その翌年の 1974 年に筆者は東西冷戦の最中のベルリンを訪問した。最近見た彼の息子の制作したドキュメンタリー番組の中で彼は語っていた。西側出身の彼が東ドイツの音楽監督という職を得ると「悪魔と手を結んだ」と非難する親戚がいたと言う。また、彼は「社会主義やマルクス主

義を信奉するか」と聞かれると、「私の知識は未熟だから答える自信はない」としか答えようがないと語っている。この時代彼はドレスデン国立歌劇場管弦楽団とも名演を繰返し、ローマ法王や、バイロイトの演出家たちからも高い評価を得ていた。彼はまた「どうして東ドイツでは優秀なオーケストラが育つのか」と聞かれると「物資もない中、その土地の住民がオーケストラを大切にし、優遇したから」と答えている。このようにして外貨の稼げるオーケストラが揃うようになったのである。もちろん彼は東ドイツ政府から特権待遇を受けていてオーストリアのパスポートで東西ベルリン、東西ドイツ、世界を自由に通行し、東ベルリンで指揮をした後、週末は西ベルリンで恋人との時間を過ごし英気を養うなどの芸当も行っていたようである。

VIII-4. ベルリンでのスイートナーの録音

オトマール・スイートナー指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団のベートーヴェンの交響曲の全曲録音は、1980年から始まった。その録音風景を写真2に示す。その録音会場は、写真3に示す東ベルリン郊外のベルリン・シェーネヴァイデのキリスト教会であった。写真3は、最近名古屋芸術大学の長江先生に撮っていただいた写真であるが、郊外団地の中心広場に立つ集会場ならぬ教会という風情である。

この録音を今回聴きなおしてみるとスイートナーの演奏について多くの新発見があり、彼の演奏のすばらしさ再認識した。彼の体調がすぐれない時に彼の意欲を喚起するための施策について東ドイツのプロデューサーと一緒に考えたこと、会場が東側の大きなアンテナの近くであったため東西冷戦が激化すると東側の妨害電波の出力が増大し、スイートナーの演奏の代わりに東側の宣伝妨害放送がラインレベルで混入し、録音現場での録音系の一点アースの見直し、基板の改修等の妨害電波混入回避対策に努力したこと、1981年8月の交響曲第7番の録音からB&K社のマイクロフォンを導入し、スイートナーのスケールの大きな音楽表現が収音できるようになり音質が大幅に改善されたこと等を思い出す。



写真2. オトマール・スイートナー指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団
のベートーヴェンの交響曲の録音風景



スイートナーの子息が制作したドキュメンタリーにスイートナーの素晴らしいコメントがあった。ウィーンの大学で生徒を前にしてのことである。管楽器の演奏が始まったところで演奏を止めて音楽をぶちこわすなどと言ったのである。(音の大きな)管楽器の奏者が(音の小さな)弦楽器のメロディーを聴かずに吹き始めたら音楽は破壊される。音の大きな楽器の奏者は音の小さな楽器の奏者の弾くメロディーを注意深く聴くことが欠かせない。

過去の自分の指揮の映像を見た時のことである。指揮棒を大きく振りすぎていることが恥ずかしい。指揮棒は小さく振ることが重要であり、目くばせも併用すると良いと言うのである。最近の派手な動作の指揮者には頭の痛い話である。

写真3. 録音会場；東ベルリン郊外のベルリン・シェーネヴァイデのキリスト教会

当時のベルリンには世界で最も緊張感のある変わったモニタールームがあったことを付け加えておこう。ベルリンのブランデンブルグ門の横の壁に面して、東ドイツのレコード公社の事務所とモニタールームがあった。2つのモニタースピーカの中央にガラス窓があり、その向こうを東ドイツ兵が巡回し、その向こうに壁、壁の所々にはサーチライトを装備した監視塔が建ち、その向こうに西ベルリンで議事堂を修復する職人の顔が見えるという状況で、スイートナーの指揮する「運命」を聴いた時の緊張感は格別であった。この事務所での深夜作業を終え外に出るとサーチライトが集まり走れば撃たれるという緊張の瞬間も何度かあったことが思い出される。

VIII-5. ドレスデンでの録音

ドレスデン駅のそばの公園の丘の上に立つルカ教会は、多くの名盤の録音が行われた類まれな豊かな低音の響きを持つスタジオであった。その外観を写真4に示す。

筆者がいたころの周りの車は2気筒のトラヴァントであったが、車が新しいので当時の写真ではないことがわかる。名古屋芸術大学の長江先生の最近撮られた写真を借用させていただいた。平日は、このルカ教会の内部はスタジオと化し写真5のような状態になっており、日曜日には礼拝用の椅子が設置されルター派教会の礼拝が行われていた。



写真 4. ドレスデンの丘の上に立つルカ教会



写真 5. ルカ教会内部での録音風景

ここではヘルベルト・ブロムシュテット指揮ドレスデン・シュターツカペレの演奏による R・シュトラウス：交響詩「ドンファン」、「ツァラトゥストラはかく語りき」(DENON レーベル COCO-70417)、同じ演奏者による R・シュトラウス：交響詩「英雄の生涯」(DENON レーベル COCO-70715) 他の録音を行った。この時のモニタールーム内を写真 6 に示す。中央にスウェーデン出身の名指揮者ヘルベルト・ブロムシュテットの姿が見える。その右には日本コロムビアのディレクター結城亨氏とエンジニアの山本薫氏の姿が見える。



写真 6. ドレスデンのルカ教会内のモニタールーム

1974 年のドレスデン訪問時に丘の上のルカ教会から戦災で廃墟が並ぶ街の中央に行くと、ドレスデンの伝統あるゼンパーオペラの残骸が目飛び込んできた。そのうち再建するから残骸の石を持ち去るなという看板の横で、冗談混じりにシュトリューベンにこのオペラハウスが再建された暁には録音を担当させてほしいと頼んだことを覚えている。

写真 7 に示すゼンパーオペラは、天才建築家ゼンパーが設計したドイツを代表する歌劇場で、ヨーロッパ各地から観光客が絶えなかったという。音が良いことから、ワーグナー、リヒャルト・シュトラウスも好んだ歌劇場であった。ワーグナーに至ってはバイロイトに彼の劇場を建てる時に、ゼンパーに設計を依頼しようとしたが、当時お金に困っていたワーグナーは断念せざるを得なかったといういきさつがあった。多分ゼンパーの設計料も高額であったのであろう。

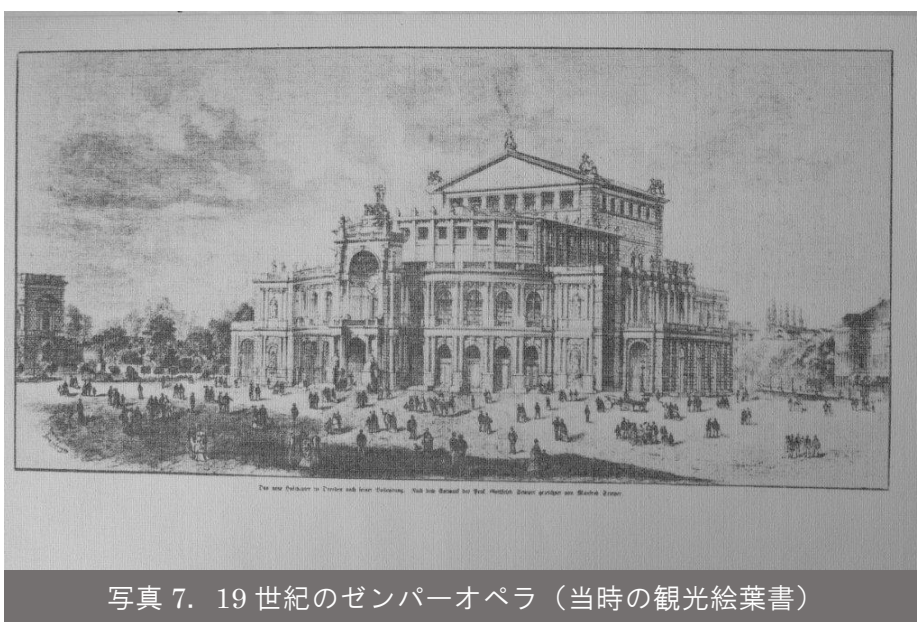


写真 7. 19 世紀のゼンパーオペラ（当時の観光絵葉書）

偶然、筆者が最初に訪問した翌年から再建のための調査が始まり、筆者は他の録音でドレスデンを訪問するたびにゼンパーオペラの再建状況をチェックしていた。最初の訪問から 10 年後の 1984 年に、ドレスデン爆撃の 40 年後の 1985 年 2 月 25 日に再建記念公演を行うことが決まったとのうわさを聞いた。DENON のドイツの販売会社の協力を得てこの復興記念公演を収録することになった。

この収録は、映像はドレスデン放送局が撮り、録音技術についてはバイロイトの録音や中継を担当しているバイエルン放送の教えを請い、DENON が機材を集め、最新の技術を導入した収音を実現し、世界中に放送しろというのである。

直ちに多数の B&K マイクを集め、舞台とオーケストラピットの時間関係の乱れを補正するタイムコヒーレントミキシングの実験に取り掛かり、1984 年 12 月から現地での実験を開始した。当時、筆者は他の業務も行っていたためドレスデンから日本に戻り、仲間の高橋幸夫氏がシュトリューベン氏と共に担当し、1985 年 2 月 25 日にゼンパーオペラ復興記念の「魔弾の射手」の公演が行われ、地味なオペラの中継でありながら西ドイツで 19% の視聴率を得た。このゼンパーオペラハウスの立面図と平面図を写真 8 に示す。

この再建公演は写真 9 に示す Time 誌他を通じて全世界で報じられた。

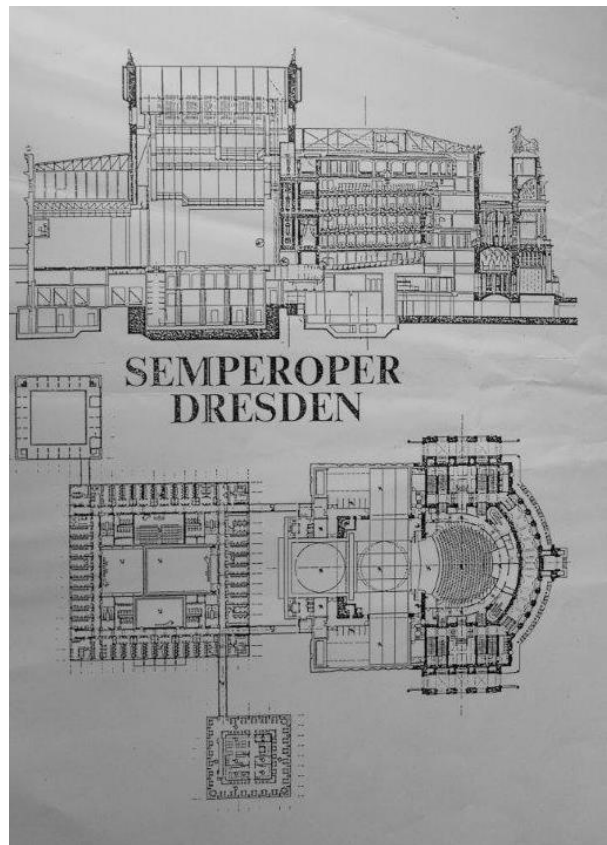


写真 8. 再建されたゼンパーオペラの立面図、平面図



写真 9. ゼンパーオペラの復興を報じた Time 誌 (February 25, 1985)

VIII-6. おわりに

ゼンパーオペラの中継の準備にあたって何回も東西ドイツを行き来した。そのたびに車のトランクの上にゼンパーオペラのポスターをかぶせておくと、検問所での荷物の検査はなく、その代わりに「どうだった」との検問所係官の質問攻めにあった。東ドイツでは「東ドイツもなかなかやるだろうということを西ドイツの人たちに伝えてくれ」と依頼され、西ドイツでは「東ドイツもなかなかやるな」と言われ、互いの尊敬の念「ミューチュアル・リスペクト (mutual respect)」が生じていたのである。これこそが4年後の1989年のベルリンの壁の崩壊につながったと筆者は考えている。

ただこの復興記念公演では残念なこともあった。当時の東ドイツのトップは音楽家になろうかとも考えたこともあると伝えられるホーネッカー第一書記であった。この音楽的才能に満ちたことになっているホーネッカー第一書記の意向だというもつばらうわさだが、主役の選択に政治的思惑を入れ、この記念公演の配役に問題点を生じさせたのである。もっとまじな配役であればと思ったのは筆者ばかりではなかったのである。

後日談もあった。ヨーロッパでのDENONの周知度が上昇したといった効果もあったが、印象深かったのは、教えを請いに行ったバイロイトとバイエルン放送の幹部をドレスデンでの復興記念公演に招待したところ、そのお礼にということでヴォルフガング・ワーグナーからバイロイトでのゲネプロに招待され、御大のヴォルフガング・ワーグナー他数名のみで聴けたことである。すべての客席は勿論、オーケストラピットから楽屋まで自由に場所を選んで音を聴くことができたので、ワーグナーが音で何を表現したかったかを自分の耳で体験出来た。演目はジェームス・レヴァイン指揮のパルジファルであった。

帰り際、バイロイトで録音したければ考えてあげるとヴォルフガング・ワーグナーが言ってくれたのだが、日本に帰ってその言葉を信用し真剣に考える人は残念ながら誰もいなかった。

このゼンパーオペラのプロジェクトの完了を機に、筆者も社命に依り録音の現場から退き、録音現場作業を後輩に譲ることになった。

次号では最近取り組んでいる事柄に関する実験の結果を報告させていただきたい。

参考資料

- ・ アナログディスク「美空ひばりオン・ステージ」日本コロムビア ACE-7079～90
- ・ 平成23年6月30日初版発行 美空ひばり公式完全データブック永久保存版 角川書店
- ・ 日本オーディオ協会設立40周年記念CD GES-9947 1992年7月1日配布
- ・ ドキュメンタリー「父の音楽～指揮者スィートナーの人生」2007年ドイツZDF制作
(日本では2009年3月22日にBS2 クラシック・ロイヤルシートで放映)
- ・ ドキュメンタリー「クラシック音楽と冷戦」Classical Music & Cold War
- ・ DENON レーベル COCO-70878 ベートーヴェン 交響曲第1番・第7番
- ・ オトマール・スィートナー指揮 ベルリン・シュターツカペレ
- ・ DENON レーベル COCO-70877 ベートーヴェン 交響曲第2番・第5番
- ・ オトマール・スィートナー指揮 ベルリン・シュターツカペレ

- ・ DENON レーベル COCO-70417 R・シュトラウス：交響詩「ドンファン」、「ツアラトゥストラはかく語りき」ヘルベルト・ブロムシュテット指揮 ドレスデン・シュターツカペレ
- ・ DENON レーベル COCO-70715 R・シュトラウス：交響詩「英雄の生涯」
- ・ ヘルベルト・ブロムシュテット指揮 ドレスデン・シュターツカペレ
- ・ DENON レーベル レコード OX-7294～96 CD 90C37-7433～35
- ・ ウェーバー作曲「魔弾の射手」全曲 ヴォルフ＝ディーター・ハウシルト指揮ドレスデン・シュターツカペレ、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団
- ・ DENON レーベル レコード OX-7297～300 CD100C37-7482～84
- ・ R・シュトラウス作曲「薔薇の騎士」全曲 ハンス・フォンク指揮ドレスデン・シュターツカペレ、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団
- ・ 日本オーディオ協会 オーディオテスト用レーザーディスク「魔弾の射手」ハイライト